

越境する知

— オーストラリアの日本研究から考える —

川端 浩平

国境を越えて旅することの大きな意義が、異なった歴史や文化を抱えた人びとが生きる社会との刺激に満ちた出会いであることは自明だ。空港から醸し出される異国の匂い、歩く人びとの身体や飛び交う言葉も新鮮だ。ある種の解放感が満ち溢れてくるのを抑えることができない。まさにこの瞬間から旅ははじまる。

そしてこの瞬間に、もう一つの旅も始まっている。それは、これまで自分が積みあげてきた常識、記憶や経験がまったく異なるルールのなかで見つめなおされ、交渉を繰り返し、再編成されていく過程。これが越境の旅がもたらしてくれるもう一つのギフト。少し大袈裟にいうならば、自らの身体感覚に依拠するフィールド調査の試みであるといえる。

これらの越境がもたらす二つの知的冒険のメリットを否定する人は少ないだろう。しかしまた、これらの知的冒険で得られたものをいかに収穫するかということには様々な厄介がつきまとう。知識や言葉が翻訳される際に生じる大きなギャップや捨象されてしまうローカルな文脈。このグローバル化した世界では、わざわざ海外旅行などしなくても何でも手に入るし、家族や友人へのお土産を選ぶのも一苦労だ。仕方がないのでコアラのマカダミアナッツでも買うかとなる。そしてまた、知的なお土産を持ちかえるのも同じように難しい。知的にグルメな日本の研究者たちに何を持ちかえれば良いというのだ。オージーの面白い研究者の発表についても紹介してお茶を濁せばよいのだろうか。あるいはウルルン滞在記か。それではあまりに退屈ではないか。

だからといって越境する旅人が何も得ていないわけではない。映像や写真、土産話にはならないエキサイティングな経験が存在する。持ちかえることができないので、知りたければ越境してみてください！としかいえない何か、これが国際発信能力を涵養するための大きな鍵であるような気がする。越境して僕たちが住んでいるこの世界の広さを知るとともに、知っていると思っ込んでいたことの中に新しいことを見つけないということもある。国や言葉や文化が異なる世界へと旅することが重要なのではない。自分の外へ出てみることに、これが面白い。

僕たちが旅したオーストラリアは欧米からは遠く離れた辺境であるが、英語等のイギリスの文化資本と豊富な天然資源によって、南半球の経済と文化のハブとなっている。日本との関係はというと、注目されることは少ないが、第二次世界大戦中は敵国であった。しかし、1960年代より経済的なむすびつきが強まり、日本語や日本研究が盛んになり、人びとの日本への関心も高い。1917年にシドニー大学でJames Murdochが日本についての最初の講義を行ったとされるが、それは異国趣味的なオリエンタリズムを超えるものではなかった。しかし、1960年代に豪日経済委員会が設立されると、日本語および日本文学のプログラムが各大学に導入される。僕たちが訪れたオーストラリア国立大学は1962年というもっとも早い時期に異国趣味ではない日本語や日本についての教育・研究プログラムが導入された場所である。近年では、Gavan McCormackやTessa Morris-Suzukiといった研究者たちが日本研究を牽引してきた。

オーストラリアの日本研究は、海外で主流であるアメリカの日本研究とは少し異なっている。すでに述べたように、オーストラリアの日本研究は豪日経済関係の強まりと不可分であるが、冷戦期における国際戦略や日本の民主化と深くむすびつづけている戦後のアメリカの日本研究とは異なる。むしろ、アメリカにおける日本研究の枠組みや近代化モデルを批判的に問い直し、オルタナティブな日本研究を立ち上げてきたことにその特徴がある。1978年にThe Japanese Studies Associationが設立されるが、その第一回目の学会冊子にはAustralian-style Japanese Studies (オーストラリア流の日本研究)は、「日本への情愛に欠けたものでは決してないが、神秘主義・異国趣味・妄想的なものではなく、合理的かつ冷静な研究」をめざすことが宣言されている。このころの日本研究は、人文科学的(歴史・文学)から社会科学的なものや現代日本社会への批判的アプローチに取って代わられるようになる(Morris Low 1997)。

このオルタナティブな日本研究を牽引した一人が、越境する社会学者である杉本良夫であった。杉本はピッツバーグ大学で博士号を取得したのちに、1973年よりオーストラリアのラトロップ大学で教鞭をとっていた。ニューヨーク出身で、グリフィス大学で教鞭をとっていたロス・マオアとともに日本人論を批判していく。アメリカ、日本、オーストラリアのあいだを越境する両者は、比較社会論という枠組みによって、日本に関するステレオタイプにオリエンタリズムやナショナリズムへの欲望を読み取り、批判的に問い直していく(杉本・マオア 1982)。そのとき杉本らが何よりも依拠しているように思われるのが、越境する自らの身体感覚である。

この日本人論批判の系譜はその後、カルチュラル・スタディーズなどの強い影響を受けて発展していく(吉野 1997、岩淵 2001)。カルチュラル・スタディーズは、戦後イギリスの労

働者階級文化の経験的研究として生まれたが、パリやフランクフルトの理論化の影響を受けて膨らんだ。しかし、1980年代のサッチャー政権時代に大学教員の待遇悪化のなかで起こった研究者の海外流出にともない、世界各地に伝播していったのだった。1990年代にはオーストラリアでもカルチュラル・スタディーズが流入し、戦後のグローバル化した同時代的な感覚から日本研究やその他の地域研究が問い直されたのだった。これら一連の越境発の日本研究が興味深いのは、人文科学的知から社会学的知へというアプローチの変化や枠組みの問い直しやカルチュラル・スタディーズの流入が、グローバルな政治・経済的な趨勢と連動した知識人の越境によって生じているという事実である。知識人が移動することにより、それまで自明であるとされてきた文化的ステレオタイプや偏見から抜け出し、より強度の高い知識の共有を可能としているのである。このことは、僕たち一人ひとりの越境——それがご近所であれ、海外であれ——そのものが、世界の知を担い、変化を引き起こしていることを示している。

グローバルな人や知の越境は、植民地主義の遺制、不平等や貧困といった圧倒的な非対称性をはらみながら、ますますローカルなことや個人的な経験や知識が出会う場となっている。今回のAsia Pacific Weekへの旅は、関西学院の参加者の個々の研究の背景にあるローカルな文脈やそれを支える個人の知的関心やモチベーション、立ち位置が改めて問い直される場であった。参加者たちは、大阪・兵庫で生活する日系ペルー人を取り巻く問題、三重県の鳥羽におけるイセエビ漁、阪神御影駅周辺の再開発と人びとの生活、西宮でオフ会に興じるオタクの文化といった相当ローカルな文脈をリアルに伝えようと苦心した。そしてそれはまた、変化しながらも硬直化しようとする日本をめぐる理解を問い直してもいる。ローカルでリアルな知からしか、全体の知やそれをめぐる権力構造を突

き崩すことはできない。このように考えてみると、国際発信能力の涵養とは、グローバルな知的枠組みや権力を内側から突き崩すために、外の世界へと一歩踏み出すという地道な積み重ねによって達成されるものであろう。以下に掲載する本特集の参加者たちのレポートからは、まさにそのような地道な軌跡を見て取ることができるだろう。そしてそのような彼・彼女らの旅の軌跡こそが一番の参考書となるに違いない。

参考文献

- 岩淵功一、2001『トランスナショナル・ジャパナー
アジアをつなぐポピュラー文化』、岩波書店。
- Low, Morris, "About the Japanese Studies Association
of Australia", in *Directory of Japanese Studies in
Australia and New Zealand*, The Japan
Foundation with the Australia—Japan Research
Centre, Tokyo, 1997, pp. 42-49.
- 杉本良夫、ロス・マオア、1982『日本人は「日本的」
か—特殊論を超え多元的分析へ』東洋経済新報
社。
- 吉野耕作、1997『文化ナショナリズムの社会学——
現代日本社会とアイデンティティの行方』、名古
屋大学出版会。